

卒業生インタビュー・シリーズ (NO.30)

三谷 康範 (みたに やすのり) 様

九州工業大学 学長

はじめに

(会長) 「各界で活躍されている同窓生への会長インタビュー」は、各界でご活躍されている大阪大学工学部をご卒業された方々に、活躍の原点や努力の源、大学への思いなどをお話し頂き、インタビュー記事としてまとめ、大阪大学工業会のホームページ(Techno-Net)で公表させて頂いております。本日は、30人目で、現在、九州工業大学の学長として大学の監理・運営に尽力されている三谷康範先生にインタビューさせていただきます。

三谷学長先生は、1986年3月に大阪大学大学院 工学研究科 電気工学専攻 博士後期課程を修了され、その後、日本学術振興会特別研究員から1988年に大阪大学低温センター助手になられ、1990年4月に大阪大学工学部電気工学科助手、その後同学科の講師、助教授を歴任され、電気工学科の教育研究に多大なご尽力をされました。その間 UC Berkeley での客員研究員も務められ、2003年4月に九州工業大学工学部電気工学科 教授に就任され、環境やグリーンイノベーションなどをキーワードに学内の管理業務に貢献されると共に、特に、新しい形での産学連携での大学の教育や研究の発展に尽力されると共に、2018年からは副学長として大学の運営に携われ、2022年4月からは九州工業大学学長として、大学のトップとして、九州工業大学の理念を明確にし、アクションプランを作成し、大学の発展に向けた新しい計画を実施されると共に、九州工業大学の未来像を考えて学長を務めておられます。



本日は、本インタビューでは二人目の大学学長先生へのインタビューですが、大学運営の工夫やビジョン、更には、学長から見た学生さんや若手の卒業生の皆様への有益なお話をお伺いできるものと期待しております。

「土君子」を育てる九州工業大学の教育

(会長) 本日は貴重なお時間をいただき、インタビューさせていただきありがとうございます。今回は都合で残念ながら大学を訪問させていただくことができず、Zoomにて遠隔で行わせていただきますが、よろしくお願い申し上げます。大学の運営でご多忙のことと存じますが、お時間を頂戴いたします。

インタビューに先立ち、まずは、皆様に九州工業大学とはどういうところかを知っていただくために、創立の経緯から現在までのお話しをお伺いいたします。

(三谷学長) 本日はありがとうございます。本学は1909年(明治42年)に明治専門学校として、安川敬一郎さんと松本健次郎さんの親子が、「国家によって得た利益は国家のために使うべきである」という信念から、わが国工業教育の向上と北九州工業地帯発展のため巨額の私財を投じて設立認可されました。

安川家は、もともと炭田開拓に携わり所有する炭鉱を合併して明治鉱業を設立し、その後も次々に事業を拡大し「安川財閥」を築かれました。安川敬一郎さんと松本健次郎さんの親子は、北九州の重工業の発展の基礎を築き、多くの企業を育て上げ、例えば、元々の炭鉱ビジネスから、製鉄所にコークスを提供することなどから官営八幡製鉄の誘致にも取り組まれ、更に電気産業も必要だと言うことで安川電機製作所をも創設され、いわば、安川電機は大学とは兄弟とも言うべき位置づけと言えます。今も深く関係が続いています。

その後、官立明治専門学校、明治工業専門学校を経て、昭和 24 年法律第 150 号国立学校設置法により九州工業大学が設置されました。

このように私立明治専門学校創立以来、今日までに多数の卒業生を実社会に多くの人材を送り出し、全国各地においてわが国工業の発展に寄与し、伝統にはぐくまれたその着実な精神は産業界に高く評価されています。

(会長) お話のように長い歴史ある大学で、その創設に関わられた安川敬一郎氏はじめ高い意志と目標を持って設立された大学なのですね。かなり前になりますが、JST (科学技術振興機構) のプログラムオフィサーの時代に貴学を訪れたことがあって、正門からはいると、幾つかの銅像が並んでいて、このように正門からの道筋に銅像があるのは見たこともなく、歴史を感じました。いまお話しのように大学の歴史を伺うと、やはり、安川氏はじめ現九州工業大学の創設に尽力された方々の想いが繋がれている感じもしますね。

(三谷学長) そうですね、私も 21 年前に初めてここへ来たときに同じことを感じましたね。

(会長) このような歴史を持つ九州工業大学ですが、九州工業大学の特徴はどのようなところにありますか。

(三谷学長) 創設の経緯かも分かるように、産業界と繋がっていることが大きな特長としてあげられるでしょう。もう一つの特徴は、本学の創立経営を託された理学博士 山川健次郎氏の高い理想のもとに、「本校は単なる技術を授くるの場所に非ずして、人間形成の道場であらねばならぬ」とされ、すなわち「技術に堪能なる士君子」を養成するという指導精神で、技術に長けているだけではダメで、「士君子」、すなわち、学問、人格ともにすぐれた、徳行の高い人たれという、一般教養を十分に持った人材を育てるという建学の精神が、今も本学の基本理念となって根付いていることが特徴と言えるでしょう。

(会長) いまのお話しの点は、よく欧米の博士取得者と我が国の博士との違いで、我が国の博士取得者はリベラルアーツに欠け、専門から離れた知識に乏しいとの指摘に通じるものがありますね。

九州工業大学を出たエンジニアの質を高めるという精神に基づいて教育するということですね。

(三谷学長) いまこそ、この精神が大切であるとの認識が増してきているように思います。

GCE 教育の推進でグローバルに活躍する技術者の養成を

(会長) その意味で、九州工業大学のホームページを拝見しますと、アクションプランでも教育をかなり重視しておられるように思いますが、改めて、九州工業大学の教育の特徴はどこにありますか。

(三谷学長) 私が九州工業大学に来たのが 21 年前ですが、その当時に有名だったのが、九州工大は留年率がかなり高いということでした。それは裏返せば、九州工大は教育に熱心にやられていたとも言えるのですが。その後の様子から見ても、九州工業大学は学生をしっかり教育し、建学の精神の「士君子」を育てるということがいきわたっていると感じます。例えば、研究の話の中でも、「学生を育てるのが一番でしょう」という話が出てくるぐらいです。

このような認識は根付いているのですが、前学長時代から力を入れたのが「グローバル教育」であり、グローバル化した社会で活躍する技術者（グローバル・エンジニア）に必要な能力（要素）を GCE（Global Competency for Engineer）と定めて、それらを養成する教育パッケージを開発・推進し、その育成のために多様な学習機会を与えることと多様な学習環境の整備等を行っています。

(会長) そのグローバル教育の実践のためにどのような施策をとられているのですか。

(三谷学長) その教育の一環として、**学生を海外に送り出しましょう**ということになって、支援を始めました。2019 年時点で、あっと驚くような結果で、学生一人あたりの**留学比率が、国立大学第 3 位**まで上がり年間 700 名超の学生が海外に出かけました。コロナ禍で激減しましたが、いまは年間 500 名程度まで盛り返しています。

大学としては、まずは、学生が海外に出かけるのを助けるための支援をしています。

(会長) どのような支援をされているのですか。

(三谷学長) 簡単に言えば、正に資金支援なのです。ただ、資金を出すだけでなく、阪大でも行われていますが、我々の**海外事務所をマレーシアのプトラ大学**に開所して、学生の海外生活の支援などを行っています。マレーシアの事務所は 10 周年を迎えましたが、そこに現地スタッフを雇用し、本学の卒業生のマレーシア人女性も一人います。また、プトラ大学の教授の息子も事務所に入っていて、このようなスタッフでこちらから向こうに行く学生さんの世話、また、向こうから来る学生の世話を手厚くやっています。

(会長) 先生の大学の規模で 700 名とは大きな数字ですね。お話しのようなサポート体制が力となっているのですね。阪大も 2022 年には 1000 名弱で、2027 年度で 1900 名を目標としているようですが、九州工大の比率はかなり大きいですね。

お話しのように、単に金銭的なサポートだけでなく、海外に出る学生の生活や勉学への支援が重要で、その対策もとられていることですね。

ご提案のアクションプランでも支援の高度化を謳っておられるのですが、教える側の教員への支援なり、工夫をされているところはありますか。

(三谷学長) **教員側への対策**については、意識統一と基本方針を口酸っぱく話していますが、個々の問題でもあり難しさはあります。特に先ほどお話ししました開学の精神を持って頂くことが大切で、常に話すようにしています。ただ、グローバル教育については、意識の高い十数名の教員が幅広く牽引し、周りが引っ張られていて、私はドメスティックで頑張るのだと思われる教員も少なからず影響を受けており、それはそれで多様であってもよいかと思えます。

高度化の意味で話をするなら、グローバルの方針で海外と繋がると、海外で行われている教育に触れることで違いや良い点もわかり、グローバル教育改善にも繋がっていて、教育の観点からもグローバル化は、好影響をもたらしていると思われます。

(会長) 海外からの留学生もかなり受け入れておられるのですか。

(三谷学長) 正規生は主に大学院で留学生を積極的に引き入れていますが、コロナ禍を通して遠隔教育ができるようになり、海外への遠隔講義を発信すると共に、海外からの遠隔講義も学生のみならず教員が受けられるなったこと、あるいは、相互の大学のラボツアーを遠隔で実施することもできるようになりました。

産学連携を教育に活かす：「社会連携講座」で必要人材の養成

(会長) 教育については、教育水準を維持しつつ、グローバル教育を通じて、いろいろな意味での広い知識を持った人材を送り出すという教育の質を大事にしておられることがよく分かりました。

(三谷学長) その意味からも、最近は**産学連携をうまく教育に繋げて**いかなければと考えております。産業界の方々にも教育への協力を頂くことも考えております。例えば、DX 分野において、FinTech とか、医療応用とかの分野は、我々だけでやろうとしてもうまくゆかないので、銀行の方とか医療関係の方々に入って貰って、例えば、いろいろな情報の生データを頂いて、そのデータをどのように処理すれば良いのかなど大学と一緒に行って頂けることで、大学の教育にもなりますし、次なる課題の発掘にも繋がります。

(会長) 阪大も含めていろいろな大学で産学連携を行っておられますが、共同研究活動では、当然一定の学生が関与するのですが、研究の実施能力の向上には繋がりますが、なかなか人を育てる教育と結びつけることに苦慮しておられると感じもしますが、その意味で色々な工夫をされているのですね。

阪大では、博士課程の学生を支援する産学連携も進んでいて、博士課程で学ぶ環境への産からの支援については一つの方向を示しているかと思います。

(三谷学長) 我々はいつも阪大さんの動きを見て参考にさせて頂いて、産学連携の共同研究講座をつくったのですが、我々が名付けている「**社会連携講座**」は、**産業界と一緒に人材育成を**しませんかということがポイントなのです。例えばいまでいうと、半導体人材育成を自治体と共に行っていますし、**GAP ファンド**を出しているベンチャーキャピタルや銀行が入ってきて人材養成を一緒にやってくれています。

【参考】

GAP ファンドとは、戦略的に大学の研究室に開発資金を提供し、基礎研究と事業化の間に存在するギャップ (GAP) を埋めることを目的とした基金 (ファンド) のこと。ファンドは大学自身が運営するものもあれば、複数の大学が集まってつくったコンソーシアムが運営するものもあります。近年の気候変動やエネルギー問題などの世界的な課題を解決するため、大学では研究成果の技術移転や大学発ベンチャーの創出のために GAP ファンドを活用する事例が増加している。GAP ファンドは資金を集める重要な役割を果たしている。

(会長) いろいろな産学連携がありますが、なかなか面白い工夫をされていると思いますね。

教育のお話しをお伺いしてきましたが、九州工業大学での研究活動の特徴はどのようなところにありますか。

(三谷学長) そうですね、一つは、いま進められている「**環境モデル都市 北九州**」に本部を持つ大学として、**環境とエネルギー**は外せない課題であろうと取り上げていて、環境の問題では廃棄物の処理とか、先ほど申し上げたマレーシアでは、**パーム油**の廃棄処理問題が深刻で、直接入り込んで研究活動を行うなど海外との連携の広がりにつながっています。

もう一つは、近くに**安川電機**があり、ロボット人材などは街を挙げて「見える化」しており、その開発研究と人材養成を行っており、ある意味地域と特徴を踏まえた研究連携を図っています。安川電機さんは3年ほど前に、大規模な安川テクノロジーセンター (YTC) を設立されましたが、その中に九州工業大学のサテライト研究室を設けて頂いて、研究者が常駐して研究活動を行うと共に、当然学生も参加しております。このような共同活動でネットワークができ、また**地域への広がり**にも繋がっています。

(会長) 安川電機さんは、私の専門の溶接では**アーク溶接ロボット**では、当初はかなりのシェアを誇られていて、それは、単なる腕を持ったロボットでなく、溶接現象を考えた溶接ロボットということで評価が高かったのです。私の同期の卒業生が開発に関わっていて、使う対象の現象をしっかりと知って開発する姿勢が安川電機さんの特徴だったように思います。そのような安川電機さんと共同で開発と人材養成をなされていることは効果を生むことが期待されますね。

小型衛星の打ち上げと宇宙模擬空間を持つことが人を呼び込む

(三谷学長) 後は、既に有名になっていますが、**小型衛星**の開発で、打ち上げ数、大学・学術機関の中で7年間続けて世界一を誇っていて、衛星利用のアプリケーション関連の宇宙ビジネスにも繋がっています。このようなトピックスを持っていると、海外で衛星を打ち上げていない国から、国が学生を送り込んでくるなど、人が集まってきます。なぜ九州工業大学がこの分野で強いかというと、本学は学内に**宇宙空間を模擬するチャンバーや装置**を揃えて持っているという強みがあります。例えば、JAXAの「はやぶさ」の初号機などは、本学で試験を行いました。

(会長) そのような装置を持ち実際に衛星打ち上げをしておられ、宇宙というようなキーワードは学生さんが興味を持たれるでしょうね。

(三谷学長) そうですね、宇宙に関しては、全国区で学生さんが集まります。東京や大阪からも衛星やロケットを目指して入学してくれています。

(会長) 確かに学生さんを呼び込むための大きな目玉ですね。

先ほどのお話の産学連携を活かしたりや衛星などの話題性のある活動が見えることは効果の大きいことですが、地域性からの人材の要望も大きいかと思いますが。

(三谷学長) そうですね、地域で求められる人材を養成することも責務で、いまは九州では半導体が大きな話題となっており、熊本大学さんは、完全に半導体に特化した戦略を立てておられますが、我々は

半導体特化では少し危ないかとも考えています。私も電気系であり、半導体産業の山・谷を見てきましたので、将来を見たときに少し躊躇があり、周辺技術を含めた技術人材の輩出など適切な判断が求められますね。

大学の運営について企業からの外部役員の存在を活かす

(会長) 九州工業大学の教育研究に関しての特徴などお話し頂きましたが、2018年からは副学長として、そして2022年4月から学長として大学の管理運営に携わられてこられました。運営で工夫されたことなどはおありでしょうか。

(三谷学長) そうですね、4年ほど前文部科学省が大学の理事に外部から複数人配置するようにとの意向を示しました。ほとんどの大学は文部科学省から理事を招いておられるのですが、本学は**正に産業界から**ということで、安川電機から招きました。それによって**企業目線から**大学内の事務のあり方や教育研究上の運営のあり方などについて見て頂き、改革すべき点をご指摘頂いて改革に着手しました。まずは、**大学は指揮系統が曖昧**ではっきりしていないことでの錯綜や無駄があるとの指摘があって、大学に本部制を取り入れて指揮系統をはっきりさせることから始めました。このような企業目線の組織改革を行っていることは、他にあまりない改革であろうと思っています。

(会長) やはり、大学のガバナンスの課題についての指摘は前々からいわれては来ましたが、外部役員に企業目線からの改革に取り組みされたというのは、一つの特徴ある取組ですね。

ただ、阪大も大学法人法の改正で運営方針会議の設置が求められ、これまでの役員会での運営に加えて、運営の監督のための体制強化を図る組織を、外部委員を過半数にして設置しなさいと求められていますが、正に大学の大きな運営方針をどのように決定し、実行していくかについては、今後の各大学の運営のあり方に大きく依存しそうですね。

このような運営方針に文部科学省からいろいろと指導がなされる中で、九州工業大学では着実に課題の抽出に、特に指揮系統の明確化で全体的な組織運営のあり方を考えられたということは実質的な運営改革に繋がっているのですね。

このような組織改革を進められる中で、よく言われる教員が教育・研究に専念できるための、何か工夫をしておられますか。

(三谷学長) その点は何か工夫したいとは考えてはいますが、なかなか進まないのも実情です。仕事の種類と誰が担うかの系統的な業務分類が、大学は不明確で一番遅れていると感じています。このあたりについても、企業からの理事の方に、5年単位、10年単位での長期的視点で改革の方向を示して貰うようにしています。

大学での仕事の効率化については、長い目で取り組んでいきたいと考えています。

(会長) 九州工業大学は3学部あるようですが。

(三谷学長) いや、学部は二つで、大学院は研究科が三つ(1研究科、2研究院)ということになります。

(会長) ところで、その三つある大学院の組織間の関係や連携などについて、運営上、何か特徴がありますか。

(三谷学長) 本学は5700人の学生がいて、教員が350人ぐらいなのですが、言ってみれば阪大の工学研究科の一つとほぼ同じぐらいのスケールですので、3つの部局の独立のような運営にはならないと考えています。例えば、研究センターなどの設置に当たっては、全学組織として考えていただくことにしています。センターを提案するときには、**必ず3部局を巻きみ**、そこでの連携を大切にしています。このような方針を出すことで、連携だけでなく人事の交流にも繋がっています。これらのセンターにはインセンティブを与えていて、獲得した資金の一部は必ずバックすることにしています。この施策で生き活きと活動するグループが出てきたという効果を生んでいます。

(会長) 大規模な大学の場合には、歴史のある部局があり、部局間の連携などはかなり抵抗があつて難しく、苦勞されているところではあるのですが、九州工業大学の部局は学問分野が近く、規模も大きくないといスケールメリットを活かされているのかも知れませんね。

(三谷学長) スケールと言う点では、工学部で6つの学科、情報工学部で5つの学科があるのですが、今度、両学部とも「**1学科制**」にいたします。

(会長) その一学科にされることは、研究では繋がりがつけやすいとは思いますが、教育という点では、歴史ある各学科がそれなりに確立した科目制を取っていることで、大学科にしたときの難しさがあるとは思われますね。阪大でも大学科制を取っていますが、結局は学科内のコースが元の学科を担っていますので、少なくとも教育体系ではどこが変わったのかといわれそうですね。

今後の制度では入学生は、工学部や情報工学部に入ってくるということですね。

(三谷学長) そうです。一学科制にするのは主専攻(いわゆるメジャー)に加えて副専攻(マイナー)を学生が主体的に学べるようにすることを狙ったものです。副専攻は単に他のメジャーの基礎を学ぶというだけでなく、経営や起業、グローバルなどの視点でのコース設定も計画しています。入学してくるときに、方向性を決めた「**類別**」入試を行います。ただ、入ってから、気が変わったときには移動できるようにもしています。

(会長) 私の現役時代も、学生に学科(学びたい分野)の変更を認める(転科)ことには、大反対する先生方がおられ、なかなか進められませんでした。現在は、研究活動を目的別に旧の学科をまたいでグルーピングする制度が導入されています。ただ、教育での融合は難しく、研究活動での融合を目指して、大阪大学工学研究科ではテクノアリーナ構想と称していて、研究活動を学科の枠を超え、かなり活性化しているようです。教育に学科の融合を持ち込むことへの成功を期待したいですね。

大学の将来像を見たときの運営のあり方は：リカレント教育のための会社を創設

(会長) いままでのお話にも関係しますが、九州工業大学の将来像としてどのような形を考えておられますか。

(三谷学長) そうですね、将来を考えたとき、**少子化の問題**は、我々の規模の大学ではすぐ目の前に差し掛かった喫緊の課題と考えています。

一つは、今後の体制の中で「**リカレント教育**」を一つの大きな柱に考え、そのための**100%出資会社を創設**しました。それぞれの教員が持っているデジタルコンテンツを会社の方にお貸しして、会社の方がそれを活かした教育コースを整備して、教員がその教育に関わる時には兼業でというということになります。また、会社の方が、必要なカリキュラム上で企業等が求める新しいコンテンツについては、大学の方で協力して作っていくということになります。

100%出資ですが、学外に会社を創設しましたので、場合によってはプログラムに応じて他大学の先生に協力を頂けるようにもできる体制となっています。

(会長) リカレント教育に注目された動きは、時流に乗ったものといえますね。リカレントやリスクリングという言葉は政府も取り上げていて注目度は高いのですが、その内容をどう進めるかが課題で、実体をキッチリとプロモートしながら進められたということでは、その意味で先行する好事例といえますね。

(三谷学長) 本学は、定員 450 名で、大きなボリュームを持っている情報工学を飯塚市に持っています。学部単位で情報を持つのは国立大学では本学だけです。そこで行われている DX、情報、AI などの教育内容を会社の方では欲しがっています。また会社の新人教育の要求もあり、その辺りの目標にあった教育プログラムから始めています。これらのリカレント教育システムの作成は、外部の会社から招いた社長さんに行って頂いています。

(会長) そのリカレント教育を受講されるのはどのようなところが多いですか。

(三谷学長) いまは、比較的大きな企業の**新人教育**が多くて、そこである程度のボリュームゾーンを確保し、その後、本学のOBなどの「**継続的学び**」ということで、正にリカレント教育を行います、そのためにも本学の**同窓会**にも関与いただいています。同窓会から補助金を出して頂いて、新しい情報教育を受けられるようになっています。

(会長) うまいシステムをお考えですね、工業会でもリカレント教育を一つの事業として考える話はしては来たのですが、なかなか同窓会が主体でとなると難しく、大学が行われることに同窓会が協力する形が好ましいのですが、なかなかうまく廻ってなくて、検討が続いている状況です。

九州工業大学方式のうまいシステムを構築されたのですね。

(三谷学長) このような動きを行っているると他の資格取得支援を行っている会社で科目内容に重なりはないのですが協調することで、受講者が増える効果も期待できますねなどと言ってこられている事例も出てきました。

(会長) いま政府などからもリカレント(リスクリング)教育が話題として上がっているのですが、「リカレント教育とは」の**本質**があまり理解されていない中で、どのようなシステム・制度であるべきかが定まってないと思われれます。

欧米では、就職後に大学で学び、その結果新しい道を見つけて新しい会社に就職するようなことが普通に行われていて、大学を卒業しても学び続けるという流れができているように思いますが、まだまだ、我が国では「**学び直し**」が定着していない中で、リカレント教育をどのようにするかが問われていて、九州工業大学でのシステムがどのように定着していくかに期待が大きいですね。

(三谷学長) 確かに、博士人材などが、就職後に大学に戻ってきてくれる形ができると、博士人材への評価も変わってくるのが期待され、その意味でも、九州工業大学を卒業・修了したことの価値が変わることが大学の将来像にも大きく影響することと考えています。とにかく、卒業生が世間から評価されることが大学として非常に重要と考えています。

多様な学生と多様で有用な人材養成へ繋げるために

(会長) 将来像の一端をお聞きしましたが、このような状況下にあって、学生さんへどのようなことを望まれ、あるいは期待されますか。

(三谷学長) そうですね、阪大さんなどでは学生のレベルがそれほど大きくばらつくことは無いかと思いますが、本学の規模の大学で、いま起こっていることは、**学生の層のばらつき**が次第に大きくなってきていることです。そのような状況下で教育の質を保とうとすると、「教育を熱心に行っています」だけでは耐えられなくなっています。そこで大切なことは、世の中で通じるような人材を送り出すことが重要になると考え、**産業界との教育の連携**を目指し、学内に企業から入って頂いて教育研究活動を行って頂き、そこに学生が参加することで社会に通じる人材養成を既に行っています。いまは、大学の1年生から参加している状況も見られています。企業の力を借りて、**大学内に小さな実社会**を作って、社会が求める幅広い人材養成に繋がるような工夫を行っています。

そのようなことで、単に座学のアントレプレナー教育でなくて、キラキラと輝いたアントレプレナー達にきて頂いて、学生の周りにそのような人々がいるという状況を作っているのです。興味を持っている学生には、**どんどんと実際に行動に移して貰うこと**を目指しています。

(会長) いまお話し頂いたように、阪大でも考え方が多様な学生さんが集まってきていて、その多様性を認めつつ、どのような形で育て上げるのが良いかは、現在の課題であるように感じます。

そのような意味合いからも、一つの実践的な取組であると感じます。

(三谷学長) 多様の中で、何をしなさいでなく、**何かを目指そうとする学生**を、どのように支援し目標に向かわせるかが教育と考えています。このような教育のあり方なども考えなければ本学などは生き残っていきません。

(会長) そのような観点からの新しい教育システムの導入については、是非成果を期待したいですね。学生の多様性の中から、また、多様な有用な人材が育っていくことになればいいですね。

(三谷学長) 教育面での産学連携の面では走り始めたところで、まだまだ試行錯誤をしているところもあるのですが、例えば、立命アジア太平洋大学 (APU) さんとも話し合っていて、Super Global 事業の後継の **SI (Social Impact) 事業**のために、彼らと一緒に事業を進める相談をしています。

APU は半分以上の学生が留学生ですから、そのグローバル環境を使わない手はないというのが我々の考えで、また、先方は、我々の持つ情報 DX は欲しい、そうでないと現況を踏まえた優秀な人材養成に繋がらないということで利害が一致し、協同関係を確立する方向で、申請をしました。

これがうまくいけば、学生の多様性が一気に膨らむことが期待されます。

【参考】大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業

大学の国際化によるソーシャルインパクト創出支援事業は、国内外での国際的な共修のための体制の構築等を通じ、更なる大学の国際化の推進、日本人留学生の派遣、優秀な外国人留学生の受入れ・定着それぞれが相互に作用する好循環の創出を目的として、文部科学省において令和 6（2024）年度から開始される事業です。

（会長） 九州工大では、海外への留学生を沢山出されていることと、留学生の多い APU などとの連携・交流を目指されていることは、学生にとっても好影響でしょうね。いまの学生にとって、異文化に触れるということは非常に大切で、留学でなくとも、旅行でも、また、海外からの留学生とでも触れあい、感じることは非常に重要かと思えますね。その機会を大学として準備することは重要な施策ですね。

（三谷学長） APU に関しては、寮だけを見ても国際化そのものであり、そのような中に本学の学生が入れば育つと感じますね。本学の規模で、小回りのきく運営ができることを最大限活かしていきたいですね。

電気工学科に入学し、大学での教育に驚きも：いま、グローバル教養教育をめざす

（会長） これまでは九州工業大学の特徴や運営、今後の方向などに関する大学の経営のポイントなどのお話を伺ってきましたが、それでは、遡ってまずは大阪大学への入学時点のお話しをお伺いいたします。

まずは、先生は、どのような動機から工学部電気工学科を目指されましたか。

（三谷学長） 実は、私は愛媛県の今治の生まれで、父親は、瀬戸内の漁船のエンジンの据付、保守点検を事業として行っていて、そこで育ちましたので、エンジンをばらすなど機械をいじることは日常茶飯事に行っていました。実家の中の話では、扱っているのは「機械」だけれど、これからは「電気」の時代だろうという父親の言葉に洗脳されながら電気工学科を選び、研究活動までしたということです。私は、阪大のとき超電導工学実験センターにおいて超電導でエネルギーとして電気を保存して電力の制御に活用するという研究を行っていたのですが、実家でいわれた言葉に取り憑かれていたともいえますね。

（会長） 入学された時期は、それまでのとにかくものを造るが基本で、造船や建築などの人気が高かったところから、電気、電子の人気が大きくなってきた時期でしたね。

（三谷学長） そうですね、我々の時代は丁度「電子立国日本」といわれた時期で、電子の人気が上がった時代でした。

（会長） 当時は、大阪大学へは四国の高校からかなり多くの学生さんが入学されていましたね。工学研究科でも、私の前任と後任の両研究科長も愛媛と高知の出身でした。いまは、四国からの入学者がかなり減っているようです。

その今治から来られて大阪大学に入られての印象はどうでしたか。

(三谷学長) 私の入学は昭和 52 年 (1977) ですが、まだ、最後の学生運動が残っていて、ヘルメットを被った連中がデモをしていて、バリケードなどで、1 年生最後の試験が実施できなかったことなどもありましたが、それが最後でした。大学とは何だろうとの戸惑いがありました。小さい頃から連合赤軍などの話を見聞きしていましたが、目の前のデモを見て、まだこんな世界が残っているのかとの驚きでもありました。

(会長) そのような始まりだったようですが、先生らの時代はまだ教養部があって、教養教育があった時代かと思いますが、教養教育は高校の授業との違いなどから、どのような印象でしたか。

(三谷学長) 教養教育はある意味広い分野で、どこの時点でどのような興味を持つのかによるのかと思いますが、非常に特徴的な講義が多かったですね。いまだに印象深いのが、法学の講義だったかと思いますが、安楽死を取り上げておられて、いまでも話題となりそんな内容の講義を当時既にされていました。それは、モルヒネの話で、痛み軽減のために使われるのですが、モルヒネは常用性があるから、徐々にその量を上げなければならないので、どんどん与えていくと、最後は致死量になるのですが、これを与えたときに殺人になるのか安楽死になるのかとの話で、強烈な話だなあと覚えています。

大学に入って学ぶ講義が、それぞれにかなり強烈な印象が強かったですね。

(会長) そうですね、当時の教養科目は人文科学・社会科学などの科目は理系に関係ないような印象でしたが、今となってはかなり面白く特徴ある講義が多かったとの印象です。このようなりべラルアーツは、人の広がりからも重要と思いますね。でも当時はそうは感じてなかったのも事実です。

(三谷学長) そうですね、当時、犬養孝先生の万葉旅行が実施されていたこともあり、楽しい思い出もあり、教養教育のあり方については、いまの立場で考えさせられますね。

(会長) 九工大では教養教育はどのようにされていますか。

(三谷学長) 本学では、教養教育の担当のために、**教養教育院**が設置されて教員グループをまとめて教養教育を行っているのですが、今回の改組に当たって、先ほど話をしました**グローバル・コンピテンシー・プログラム**に教養教育チームがうまく入り込んできて、理系の**グローバル教養教育**をしっかりと考えて頂いております。結構面白いプログラムが出来上がってきており、受けてみたいなども感じております。

(会長) グローバルな視点からの教育では、工学部ではグローバルな視点からの**地域文化**などの講義を全くといっていいぐらい受けていません。研究科長の時に大阪外大と統合したのですが、その折に外大さんは地域文化の専門家であり、是非工学部の就職が決まった 4 年と M2 を対象に、例えばイスラム文化とかの地域文化についての集中講義をお願いしたいと話して、行っていただいたことがあります。工学部の学生は入社後直ぐに海外に出かけるものも多く、その意味で文化を理解し、グローバルなセンスを持つことが重要で、この九州工大の試みに期待したいですね。

(三谷学長) 先ほどお話ししました、本学のマレーシア事務所の設置目的はその点にもあり、マレーシアに行けば、マレー系、中国系、更にはインド系など多くの文化圏の人々がいて、学生がマレーシアに行くことで、正にグローバルな地域文化を経験して帰ってきます。主としてマレー系の方々のイスラム文化圏であり、イスラム文化を体験できる一方で、いろいろな系の方々がおられ、例えば、マレーシアでビールや豚肉料理を飲食できないわけでないことを感じるなどの世界の実情を生で体験ができていると思います。

(会長) そのような地域文化状況を実体験することに重点をおいた教育システムをとられていることはいいですね。

「理論体系は、最後は美しい」と聞いて電力の分野へ

(会長) ところで、大学時代は何かクラブ活動などされていませんか。

(三谷学長) 教養にいる1年半だけクラブ活動を行い、軟式野球と古美術研究会に入っていました。

(会長) かなり異なった分野の二つだったのですね。

(三谷学長) 軟式野球は、正に教養の時代の1年半だけでした。古美術研究会は、神社仏閣が好きなタイプでして、長谷寺とか室生寺とかに行きまして、中の仏像がどうなっているかなどと鑑賞することを楽しんでおりました。

現状は、あまり時間的な余裕もないのですが、例えば、学生時代から楽しんでいたスキーも、けがをしたりすると大変なので封印していますが、また余裕ができれば行ってみたいですね。

いまは、もっぱら庭いじりが日課で、変わり種ではパッションフルーツを育てています。綺麗な花が咲き人工授粉を行えば美味しい実がなるなど、凝っていてかなりうるさいですよ。また、食用、観賞用と幅広く種からとか挿し木とか特性に合わせていろいろな種類の植物を育てています。

(会長) 教養を終えられて工学部で吹田に移られて、電気工学科の講義を受けられましたが、当初の想いなどの比べてどのような印象でしたでしょうか。

(三谷学長) 電気工学科の講義を受けて、私はいろいろな恩師に影響を受けましたが、その中でも、松浦先生の講義を受けて、私が「電力」の方面に進んだともいえます。松浦先生は「理論体系は、最後は美しい」と話されました。現象についていろいろな式がごちゃごちゃと出てくるのですが、最後は理論的にまとまると美しい姿が出てくるということをお話され、非常に印象に残りました。

私も研究でも色々と数式をいじり回していたのですが、最後は美しい姿に行き着くことを常に意識しておりました。

(会長) やはり電力を研究対象として選ばれたのは松浦先生の影響が大きいということでしょうか。

(三谷学長) そうですね、電気ということでは、電気エネルギーをどうするのか、また、貯蔵ができると

広がるのですが、ただ、研究室は松浦研にはいかず、超電導エネルギー貯蔵の研究を行っている西村研に入ったのですが。

(会長) 電気系でも最近では電力部門への志望者が少ないとの話も聞いているのですが。先生らの当時は、電力の必要性が増し、配電・送電については大きな話題があったように思われますが。

(三谷学長) やはり日本全体の問題でもあるのですが、我々の分野の話では電力会社の力が弱まったことにつきると思われます。これまでは電力会社の方でいろいろな話題を提示し、その解決に大学などの研究者が自由に取り組み、解がでると面白いとして活用されるというパターンが廻っていて、大きな動きとなっていましたが、最近では日本全体がそのような余裕を無くしています。電力会社は高まる需要に合わせて直流送電など新しい技術にもどんどん挑戦され、電力会社が動くと、強電メーカーの日立、三菱、東芝を中心とした各社が動き、大きな流れができていました。

(会長) このような状況を見て、何が課題だとお考えですか。

(三谷学長) さあ、何が課題でしょうか。効率化のみを求められていることが一つの原因でしょう。

大学の運営でもそうですが、効率化を求め始めると、余分なものを切り落としてかえって余裕がなくなるのです。

(会長) そうですね、そぎ落としたものの、その後には余分なものが出てくることも多い気がしますね。だから、何のための効率化なのかということに。

海外体験が生きる

(会長) 阪大で研究を始められて、1994年にカリフォルニア大学で研究されていますが、どのような経緯で、どのようなことを行われましたか。

(三谷学長) どちらかといえば、背中を押して貰ってということで、海外通の辻先生から海外に行くように日々言われていて、当時文科省の若手枠での海外派遣プログラムがあって、制限が35歳以下なのですが、私が行ったのが34歳10ヶ月で滑り込みました。工学部では派遣枠を学科持ち回りで行っていましたので、ずっと申請を出していたのですが、諦めかけたときに滑り込みということになったのでした。

行った先がカリフォルニア大学バークレー校で、電力べったりの研究では面白くないと思ったのですが、行った先の先生のところにはいたポストドク研究員が「カオス」の研究を行っていたのです。先ほどの松浦先生の話にあった理論的で美しいものをつきとめていくとカオスになるので、電力システムの解析にカオス理論を入れながら、物理的に何が説明できるかなどの研究を体験させていただきました。正にカオスの状態でしたが、非常に楽しい10ヶ月を過ごさせていただきました。

(会長) そうですね、あの時分はカオス理論が流行っていたときで、我々も溶接欠陥を持つ溶接部の信頼性解析にカオス理論を用いるなどの研究を行った記憶があり、共同研究者が学会で受賞したこともありました。

米国に滞在されて何か特に感じられたことがありますか。

(三谷学長) そうですね、いまの若い者に海外に行き、まずは色々と経験してくることを勧めているのは当時の貴重な経験からです。とにかく最初に分かったことが、海外に行く**と英語を話せるようになる**ということが幻想だったということでした。家族は連れて行っていたのですが、大学の研究室では日本人は一人だったので、英語でのコミュニケーションが必須で、話すことはいろいろなことを知るための基本でした。前記の研究者がインド人で、時々やってきては研究室にまつわる色々な噂話をしてくれて、よくわかりませんが和みましたね。

94年から95年に行っていたのですが、95年に**阪神淡路大震災**と**サリン事件**があつて大変な時期だったのですが、話題として日本は地震で大変だとの話を、周りの教授にしたら、カリフォルニアはもっと地震が大変だなどと言われ、如何に自分中心にしかものを考えてなかったのかと思ひ知らされました。

(会長) そうですね、私も阪神大震災後に地震による鋼構造物の被害の状況調査や耐震対策などの研究を行っていましたが、阪神の丁度1年前の同じ1月17日に「**ノースリッジ地震**」がロサンゼルス近郊であつて、死者57名の大地震で、阪神淡路大震災の研究では必ず引用する事例です。カリフォルニアでは断層が地表に出でている地域もあつて、地震はしばしば起こっていますね。

このような話題を話し合うことで、ある意味繋がりや人々の考えも分かるということで、英語でのコミュニケーションは大切ですね。

(三谷学長) やはり、海外でいろいろな体験をすることは、正に大切だと実感しましたね。その帰国後から、留学生も受け入れるようになり、その意味ではグローバル化のきっかけでした。

九州工業大学に赴任して：環境マネジメントに取り組む

(会長) その後、2003年に九州工業大学工学部電気工学科の教授として赴任されるのですが、そのいきさつは。

(三谷学長) 動機と言え、当時は辻先生が教授で、伊瀬先生が助教授の体制で、2002年に伊瀬先生が教授に昇任された背景があり、自分は今後どうしようかと考えるところがあったのですが、丁度その時に九州工業大学で教授ポストの公募があるということで、挑戦させていただきました。

(会長) 赴任された九州工業大学の状況はどのように感じられ、どのようなところに注力されましたか。

(三谷学長) 丁度、独法化の前の年でしたが、知り合いの教授もいて、そこそこに優秀な人材が集まるので、何かやろうとすればできる環境があるとの意見をもらいました。

私は電気エネルギーの研究をしてきましたから、**環境エネルギー**の研究はしっかりと行わなければならないと思いました。当時の学長さんは、阪大の理学部卒の宮里達郎学長で、次の学長さんの下村輝夫学長がいろいろな施策を行っておられ、環境の話を色々としておりましたら、大学も環境報告書の発行が義務付けられるので、その業務を含む**環境マネジメントセンター**を作って、**その長をやれ**ということでセンター長に就任しました。そこが環境問題に取り組むことになったきっかけとなりました。

(会長) その組織は電気工学科とは全く別組織なのですね。

(三谷学長) そうです。発想は全く単純で、大学も環境報告書を書かなければならないということで、それなら組織的に行った方が良くということでもセンターをつくり、いろいろと環境の仕事をしている人を集めて、活動を始めたのです。

(会長) その後グリーンイノベーションなどと環境がらみのお仕事をされているようですが。

(三谷学長) その件は、先ほどお話ししたマレーシアにも絡む話で、マレーシアでバイオの話などが進んでいたのですが、それを繋げていって、外国人が関係し、また、日本からも学生が参加する国際共同活動を、グリーンイノベーションをキーワードに学内でまとめて研究活動を行うようにしようとして「**グリーンイノベーション実践教育研究センター**」を創設しました。そこに**教育**の言葉が入っているのは、学生さんが参加し、学んでいただき、単なる研究センターでなく、海外交流を含む教育にも取り込もうとの発想で創設しようと文部科学省に概算要求に行ったら、これは面白いということになって認められました。

その頃からマレーシアに学生を継続的に送り込むようになり、研究室に入ってきた学生を研究がらみで送ることが動き始めました。

(会長) その後、イノベーション推進機構などの活動を指導されていますが、どのような狙いだったのでしょうか。

(三谷学長) そうですね、前の学長に呼ばれて、**産学連携**の担当者を探しているのだがどうかと言われて、それではとすることで産学連携やURAの担当を引き受けることになりました。それまでも企業とは共同研究を続けてはいましたが、この役割を引き受けて、大学として組織的に行う仕組みの構築を担当することになり、色々と学ばせていただきました。この経験が今の大学運営に繋がってきています。

大切にしていること「多様性」

(会長) 九州工業大学の運営に携わられることになったいきさつを含めて、いろいろな動きや努力されたポイントなどのお話を伺ってきましたが、このような全学的なレベルでの活動で、特に大事されていたことなどはありますか。

(三谷学長) 米国に行かせて貰ってから以後の話なのですが、特に「**多様性**」については大切にしてきたつもりです。多様性について色々と学んでいましたが、**多様性とイノベーションの関係**について書かれた本を見つけました。イノベーションがなぜ起こるかという、地道に進んで行くイノベーションもありますが、全く違うものが合わさったときに、全く異なる化学反応が生じてイノベーションが起こってくることもあります。**融合のイノベーション**と呼ばれるもので、全く違ったものをどのように組み合わせるかが大切で、ただ単に組み合わせるだけでは直ちにイノベーションとは繋がりませんが、やはり違いのある多様性がなければ何も起こらないのです。すなわち、いろんな背景を持つ人を、いろいろな試みをしてきた人を、また、違う環境で進めてきた人などを集められることが一番大切なことと考えています。その意味で、多様性は大切にしています。

(会長) 異なるものの反応では、その違いを持ったものが会おうだけではあまりうまくゆかない場合が多いように思います。

(三谷学長) そうです、単に集めるのではなく、ある意味意図を持って集めることで会うことが重要で、ギラギラしながらやっている人を集めなければなりません。

ギラギラしている先生と、ワクワクしている学生が出会えば新しいものが生まれるかも知れません。このような環境を作ることが大学運営の仕事であると考えています。

(会長) そのような出会いは非常に大切ですが、大学に入り共に学んだ同級生、また、実験・研究を一緒に行った研究室の仲間など、人の繋がりが生まれる機会になっています。また、研究活動では学会などで議論をする仲間ができるなど、大学の大きな役割の一つに、人の繋がりが生まれることがあげられるかと思います。このように生まれた人の繋がりは、イノベーションを生むにも大切なポイントだと思います。

(三谷学長) そうですね。人の繋がりとという点では、大学に入る前から学び続けている訳で、大学「入試」という概念を「接続」との概念とすることを提案しており、実際は小・中学校、高校、そして大学へと、更には社会へと繋がっている訳で、この繋がりを活かすことを考えないと、ネットワークなどもできません。その意味で、企業がこのような繋がりを十分に意識して、小中学校での教育にも意識していただかなければなりません。そのような概念で、先にお話ししましたような産学連携教育にも取り組んで貰っています。

(会長) 阪大でも高大接続という概念のもといろいろな施策を考え実施しているようで、学生もグループで色々と活動してくれていて、市町村とも連携し、中小学校への出張授業なども行っているようです。ただ、接続の意味を明確にして、また、どちらの立場で考えるのが重要でしょうね。

(会長) 話が変わりますが、多様性という観点から女子学生や女性教員の状況はどうですか。

(三谷学長) 本年の入試で、入学女子学生が17%程度で、女子教員はやっと10%を超えました。

(会長) 工学部ということでは、阪大の工学部の状況よりは少し女性比率が高いようですが、いずれにしても多様性という観点からはまだまだとも言えますね。阪大では入学定員の10%を推薦入試としていますが、そこでは、女子学生が50%を超えているようです。今後は女生徒の志望者をいかに増やすかが課題でしょうか。

女子学生が工学部にくれば、いろいろな素晴らしいチャンスがあり、活躍もできることをいかに「見える化」するかが重要でしょうね。

若いときの海外経験が重要：大学としてどのように背中を押すか

(会長) これまでいろいろと話を頂いてきましたが、学生さんや若手へどのような期待をお持ちかについてお話しいただけますか。

(三谷学長) もう先ほどからの言葉に集約されているのですが、若いときに色々なところ、色々なことを**経験**して欲しいですね。そのためには、自分の場合には背中を押して貰ったように、学生さんの背中を大学が押して上げるようなことが重要だと考えています。背中を押してあげないと動けない学生達も結構いるのも事実でしょうね。ただ背中を押すだけでなく、研究室で海外に出かけてきた先輩がいて、その話を聞いて、次はあなたというようなムードを作ることも大切でしょうね。本学の施策もその辺りを配慮したもので、なんとなく**自然体**にしていかないと継続性はないでしょうね。

海外の話を取り上げておりますが、必ずしも海外に行くことだけでなく、何かに挑もうとしようとするときにも背中を押して上げる施策が重要ですね。積極的に何かに挑もうとする意識が高まることを期待しております。

(会長) このインタビューをして頂いた多くの経営者の方々からも、自費でも若いときに海外に行くべきだとのお話を頂いているのですが、やはり若いときに違った文化に触れること、経験することが大切で、その後の自分の経歴にも役立ったとお考えだからでしょうね。

おわりに：「多様性が生むイノベーション」

(会長) かなりの長時間を賜り、いろいろな貴重なお話を頂きましたありがとうございました。既に有意義なお話を伺いましたが、最後に、改めて、大切にしておられる言葉があればお教えてください。

(三谷学長) 既にイノベーションのところで話をしましたが、英「タイムズ」紙の第一級コラムニストのマシュー・サイドが「**多様性の科学**」で、かなり実例を挙げながら**融合のイノベーションの有効性**を指摘しており、**多様性とイノベーションの関係**をかなり科学的に明らかにされています。組織は画一的では凋落すること、複数の視点で問題を解決する組織の重要性が指摘されています。ということは、人々をしっかりと交わせなければならぬということで、多様性のイノベーションを大切にしなければならないということです。私は、この「多様性」がうむイノベーションという言葉大切にしています。

世の中にはいろいろな多様性が存在します。究極は、大学が18歳人口以外の人々が過半を占めるような形こそが多様であり、その中から生まれる多様な背景・意識・考え方を持つ人々が交わることで新しい流れが創り出されることが理想でしょう。

(会長) 私はヘルシンキ工科大学で、日本でいう修士と博士の間の学位のコースの講義をしたことがあるのですが、しかも4時からの講義で企業からの受講者がかなり多く、正に働いている職場や職種も違う多様な人材で、テーマを与えて議論をして貰ったりしたときにも多様な意見が出てきます。確かにこのような場で学ぶことも大切ですね。

(三谷学長) そうです、我が国の大学は18歳で一斉に入学し、しかも、入試ということでレベルが同じような学生だけが学ぶ状況は、多様性に欠けますね。

本学の卒業生で、北九州市の職員が、修士を取りたいと行ってきて社会人コースに入り、授業に出ているのですが、彼は講義が無茶苦茶面白いと言ったのです。普通に入学してきた学生は、単位を取らされている感があるので、講義を面白いとはあまり感じないですね。この考え方が非常に新鮮で、自分にとって面白いとか興味を感じるものが混じってくることで、刺激にもなり、新しい流れも生み出すでしょう。小さな一例ですが、大学の教育のあり方について、やはり多様性が重要であると感じました。

経験の多様性、海外などの文化背景の多様性、それに性別の多様性などが活きる教育を目指したいですね。

(会長) まだまだ、教育の話題は尽きませんが、本日は、どうも長時間ありがとうございました。



(参考)

三谷 康範 (みたに やすのり) 様

九州工業大学 学長

経歴

【 学歴 】

1981年3月	大阪大学工学部電気工学科	卒業
1983年3月	大阪大学大学院工学研究科	電気工学専攻 博士前期課程 修了
1986年3月	大阪大学大学院工学研究科	電気工学専攻 博士後期課程 修了

【 主な職歴 】

1986年4月	大阪大学工学部研究生
1987年4月	日本学術振興会特別研究員
1988年5月	大阪大学低温センター 助手
1990年4月	大阪大学工学部電気工学科 助手
1991年10月	同上 講師
1994年10月	同上 助教授
1994年10月～1995年8月	米国カリフォルニア大学バークレー校客員研究員

2003年4月	九州工業大学工学部電気工学科 教授
2007年4月	九州工業大学環境マネジメントセンター長
2012年4月	九州工業大学グリーンイノベーション実践教育研究センター長
2014年4月	九州工業大学工学研究院副研究院長
2016年4月	九州工業大学イノベーション推進機構産学連携・URA 領域長
2018年4月	九州工業大学理事・副学長（研究・産学連携担当）
2020年4月	九州工業大学理事・副学長（研究・総務・国際・施設担当）
2022年4月	九州工業大学長

【受賞歴】

2014年5月	電気学会優秀技術活動賞技術報告賞受賞
2019年5月	電気設備学会九州支部功労賞受賞

【インタビュー後記】

今回のインタビューは、九州工業大学にお伺いする予定でしたが、諸般の事情で、初めて Zoom で遠隔で行わせていただいた。九州工業大学には 10 年以上も前ですが、訪問させていただいたことがあり、インタビューでもお話ししましたが、正門を入って、創設者の安川敬一郎し、松本健次郎氏親子などの銅像が並んでいて、国立大学では珍しい風景に驚いたことが思い出されます。

歴史ある工学分野の専門大学の九州工業大学で、私の分野ではかなり前の迎学長先生に、溶接学会九州支部長を務めて頂き、学会活動でもお世話になりました。また、私の 3 年後輩の寺崎君が九州工業大学の教授として活躍していました。彼は退職後残念ながらなくなりましたが、私が助教授の時代に助手として活躍して貰ったことが思い出されます。

三谷先生とは、阪大時代は、電気系ということであまり交流させて頂いたことはなかったのですが、電気工学科でも本流の電力エネルギー分野の研究室で、研究科長時代には三谷先生もおられた研究室の辻先生には副研究科長として国際活動の分野で助けて頂き、やはり、電気系は工学部の基幹の教育研究分野です。三谷先生は、電力エネルギー分野ということで、その後、やはりエネルギー分野で課題となる環境をキーワードに活躍されました。

インタビューでもしばしば話題が出てきましたように、学生の教育効果を高めるために、グローバル教育に注力され、多くの学生を海外に派遣することを支援するなどに力を注がれ、更には、産学連携を、産学で教育連携することに新しいアイデアを持ち込んで、社会に役立つ九州工業大学卒業生を輩出することに注力されていることが実感できました。

特に、三谷先生が強調されている「多様性」の重要性については、大学での教育のあり方に新しい試みを導入されようとされていて今後の成果が期待されます。大学の教育、更には研究活動においても、我が国の特徴でもある画一性は、新しいものを生み出すための障害ともいえるもので、産業界、地域、更には海外からの多様な人材と交わることで、イノベーションを生み出すような人材養成を目指しておられ、新しい教育の流れに繋がることを期待したいですね。

話の端々からも、三谷先生の誠実は姿が感じられ、先生の想いが九州工業大学のみならず、我が国の大学の教育のあり方に一石となることを願って……。

大阪大学工業会 会長

豊田 政男